

〈研究ノート〉

プロソディーの学習法としてのシャドーイング
 一発話の自然さに及ぼす効果についての一考察
 Shadowing as a method for learning prosody

-How does shadowing impact the pronunciation of natural speech?-

世良 時子 (せら ときこ) 成蹊大学国際教育センター

キーワード

シャドーイング, プロソディー, 自発的な発話, 音韻ループ, 言語獲得中枢 (LAD)

要旨

学習者の「自然な発音で日本語を話したい」というニーズを満たすため、自然な話し方に影響を与えるプロソディーについての学習法が必要とされている。そこで、リスニング力等とともにプロソディーの学習においても有効性が示唆されているシャドーイングを取り上げ、シャドーイングが自発的な発話の自然さにも効果をもたらすという仮説を立てる。その検証方法として、外国語環境における短期コースでのシャドーイングを用いた授業の実施、考察のためのデータとして事前事後の日本語母語話者との自由会話、OPI インタビューによるデータを用いることを提案する。シャドーイングが音韻ループの運用を促進し、第二言語習得を促す様子の一端を明らかにして行きたい。

1. はじめに

言語学習において、「自然な話し方で話せるようになりたい」というのは学習者のニーズとして高く、同時に強い動機付けでもあると考えられる。日本語学習者についても、「自然な発音・イントネーションで話す」ことを学習したいと答えている学習者の数は多い。(e.g., 日本語教育学会 1991; 佐藤 1998)

この話し方の自然さを左右する要因として、プロソディー (韻律) が重要であることは多くの研究により明らかにされている (e.g., 佐藤 1995)。したがって、学習者の「自然な話し方で話せるようになりたい」というニーズに応えるためには、プロソディーに効果のある学習法が必要であると言える。

そこで、本稿ではプロソディーの学習において有効性が示唆されているシャドーイングを取り上げ、その効果についての先行研究を概観する。また、シャドーイングが学習者の自発的な発話にも効果があるという仮説を立て、その検証方法について考察を試みる。

2. 先行研究

シャドーイングとは、「聞こえてくる音声を、ほぼ同時にあるいは少し遅らせて、できるだけ正確に繰り返すこと」(玉井 2003)である。会議通訳者の基礎訓練法の一つであるが、外国語教育においても効果的であるとされている。

外国語教育におけるシャドーイングの有効性に言及している研究は、英語教育の分野で成果が顕著である。先行研究によると、シャドーイングはリスニング能力、復唱力、発音速度について効果があると言われており (e.g., 滝澤 1998; 門田・玉井 2004; 玉井 2005), ほかに多くの実践報告がなされている。

また、日本語教育においても研究が進み始めている。迫田・松見 (2004) はシャドーイング訓練の事前事後に SPOT, OPI などの日本語能力テストと作動記憶容量を測るためのリーディングスパンテストを行い、シャドーイングが日本語の運用力促進に効果があることを示唆した。また、迫田・松見 (2005) は、シャドーイング群と音読群、書写群との比較において、シャドーイングが運用力促進により有効であると述べている。

学習者の発音に注目した研究には、荻原 (2005,2007), 高橋・松崎 (2007), 戸田 (2008,2009), 唐沢 (2010) などがあり、シャドーイングが分節音の発音やアクセントなどのプロソディーの教育に効果があるという報告がなされている。これらの結果の多くは、シャドーイング練習の事前事後の音読をデータとしている。また、大久保他 (2013) では、シャドーイング練習に用いた素材そのものではないものを用いた事前事後テストによって、その素材に含まれていた語のアクセントの正答率が上がることから、シャドーイングによりアクセントが習得されることを示唆している。これらの研究により、シャドーイングは分節音についても効果はあるが、プロソディーについて特に効果的であることが窺える。

以上のように、シャドーイングが学習者の発音の学習に有効であることについては研究が進みつつある。しかしながら、発音に言及した研究の多くが、シャドーイングに用いた素材の音読や練習に用いた語を含む文章の音読により検証されており、対話や会話という自発的な発話の音声にどのように影響を与えるかについては管見の限りでは明らかにされていない。

3. 研究の目的

3.1 検証すべき仮説

本稿では、シャドーイングが自発的な発話における音声の自然さに効果を及ぼすという仮説を立て、その検証方法について考察を行う。つまり、シャドーイング練習に用いた素材や練習した語についての効果を検証するのではなく、対話や会話で発せられる際の語彙等を限定しない発話の音声をデータとした場合でも、シャドーイングの効果が現れると仮定する。そして、その検証の手順やそれに必要な条件等について考察する。

3.2 自発的な発話の音声を扱うことの意義

シャドーイングが第二言語習得に効果をもたらす理論的背景として、音韻ループの存在がある。

音韻ループとは、ワーキングメモリの一部をなす音韻的記憶の保持システムであり (Baddeley 1986), Baddeley et.al (1998)や門田 (2007) は、音韻ループが言語獲得装置 (言語獲得中枢) ではないかとの示唆を示している。さらに、門田 (2007) では Watanabe (2005)によりシャドーイングが音韻ループの運用能力を鍛えるのに効果的であると述べられていることが紹介されている。

上述のことから、シャドーイングは、学習者の音韻情報保持の能力を促進する効果があると考えられる。そして、先行研究では具体的な語の具体的な音形を再現することに現れているその効果は、未知の語を含むようなインプットがある中では、それらを保持することにも有効であるのではないだろうか。

以上のことから、シャドーイングの効果を相手の発話というインプットのある状況下で検証する方法を考察する。また、このような実態を明らかにすることは、学習者がシャドーイングという方法を知ることにより、生活の中での多くのインプットを活用し、習得を進めていく様子の一端を明らかにすることではないかと考える。

4. 検証方法の考察

4. 1 環境と期間

学習方法の効果を測るとき留意点として、他の要因を排除することができるかどうか挙げられる。例えば、あるプログラムにおいて、数か月間のシャドーイングを中心とした授業を行った場合、その授業以外の授業、授業外の日本語のインプットや日本語使用など、多くが学習者に現れる能力の伸びの要因となり得る。

そこで、外国語環境での短期コースによる検証を提案する。まず、環境についてであるが、第二言語環境に比べると外国語環境のほうが授業外の日本語のインプットや日本語使用の機会が少ないと考えられる。外国語環境においても、インターネットや他のリソースを駆使し、多くのインプットに触れ、日本語使用の機会を得ることができる学習者がいることは事実であるが、比較としては、外国語環境におけるその授業のみのコースが適しているであろう。

上述のように、インプットや日本語使用の機会を制限するという観点から、長期コースで実施することの困難さは学習者・協力者の利益を考えると自ずと導かれると言える。そのため、短期コースであることが実現可能性を高めると考える。また、短期コースであっても、シャドーイングの効果が表れることは、先行研究によって明らかにされており (e.g., 唐沢 2010; 木下他 2011), 2週間程度のコースであっても効果を検証することが可能であると考えられる。

4. 2 使用データ

「自発的な発話における効果を検証する」、「音韻ループの運用力向上に伴うインプット活用と習得の様子を明らかにする」という2点の目的から、日本語母語話者との自由会話、OPI インタビューデータの使用を提案する。日本語母語話者との自由会話には母語話者の発話をインプットとして活用する機会が多く含まれるであろう。また、OPI インタビューでは、インタビュアー

(テスター)のレベルチェックに基づいたトピックやタスクの設定の下での自発的発話が観察できるであろう。

結果を考察する観点としては、1)ある一定のまとまりに対しての母語話者評価、2)ある語について、母語話者やインタビュアーからの発話を聞いた前後の学習者の発音の評価などが考えられる。

実践の事前事後を比較することはもちろんであるが、この2種に関しては「日本語学習者会話データベース」などのコーパスを利用し、多量のデータとの比較が可能である点も今後の研究において有意義な点であると考えられる。

5. まとめ

プロソディーの学習に有効であるとされているシャドーイングについて、自発的な発話の自然さにおいても効果が検証できる、また、その効果を明らかにすることは、音韻ループの運用能力向上による第二言語習得の一端を明らかにすることができるという仮説に基づき、検証方法を考察してきた。

検証方法としては、外国語環境における短期コースでのシャドーイング実践を行い、その事前事後に日本語母語話者との自由会話、OPI インタビューデータを用いて、結果を検証することを提案した。

シャドーイングがプロソディー学習に有効であることを、より明確にするとともに、習得過程を促進し、気づきを促す自律的な学習へ結びつくことを明らかにしていきたい。

参考文献

Baddeley, Alan(1986) *Working memory*. London: Oxford University Press

Baddeley, Alan, Gathercole, Susan and Papagno, Costanza(1998) The Phonological loop as a language learning device. *Psychological Review* vol.105 : 1, 158-173

門田修平 (2007) 『シャドーイングと音読の科学』東京：コスモピア

門田修平・玉井健 (2004) 『決定版 英語シャドーイング』東京：コスモピア

唐澤麻里 (2010) 「シャドーイングが日本語学習者にもたらす影響：短期練習における発音面および学習者意識の観点から」『お茶の水女子大学人文科学研究』第6巻：209-220

木下藍子・福田規子・迫田久美子 (2011) 「シャドーイング活動におけるリスニングの意義と役割ー日本語短期集中コースでの実践ー」『広島大学日本語教育研究』21：63-68

日本語教育学会 (1991) 『日本語教育機関におけるコース・デザイン』東京：凡人社

岡田あずさ (2002) 「英語のプロソディー指導におけるシャドウイングの有効性」『つくば国際大学研究紀要』8：117-129

荻原廣 (2005) 「日本語のプロソディー指導におけるシャドーイングの有効性に関する研究」『日本言語文化研究』7:30-39

- 荻原廣 (2007) 「シャドーイングの日本語音声教育における有効性—単音、アクセント指導を中心に—」 『国学院論叢』 52 : 112-126
- 大久保雅子・神山由紀子・小西玲子・福井貴代美 (2013) 「アクセント習得を促すシャドーイング実践 —効果的な実践方法を目指して—」 『早稲田日本語教育実践研究』 1:37-47
- 迫田久美子・松見法男 (2004) 「日本語教育におけるシャドウイングの基礎的研究—「わかる」から「できる」への教室の試み—」 『2004 (平成 16) 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 223-224
- 迫田久美子・松見法男 (2005) 「日本語教育におけるシャドウイングの基礎的研究(2)—音読練習との比較調査からわかること—」 『2005 (平成 17) 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 241-242
- 佐藤友則 (1995) 「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」 『世界の日本語教育』 5:139-154
- 佐藤友則 (1998) 「韓国および台湾の日本語学習者のニーズ調査」 『東北大学文学部日本語学科言語科学論集』 2 : 49-60
- 高橋恵利子・松崎寛 (2007) 「プロソディシャドーイングが日本語学習者の発音に与える影響」 『広島大学日本語教育研究』 17 : 73-80
- 瀧澤正巳 (1998) 「通訳訓練法の英語学習への応用 (1) —シャドーイング—」 『北陸大学紀要』 22 : 217-231
- 玉井健 (2002) 「リスニング力向上におけるシャドーイングの効果について」 『通訳研究』 2: 178-192
- 玉井健 (2005) 『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』 東京 : 風間書房
- 戸田貴子 (2009) 「日本語教育における学習者音声の研究と教育実践」 『日本語教育』 142: 47-57
- 戸田貴子 (2008) 「『発音の達人』とはどのような学習者か」 『日本語教育と音声』 東京 : くろしお出版
- Watanabe, Y. (2005) The effect of shadowing on listening and reading. *Poster presentation at 2005 SLRF Conference*. Columbia University